

「風が吹く」考

—— マンスフィールド文学の転機

平 戸 喜 文

‘The Wind Blows’は僅か1700語たらずの小品ながら、「執筆の時期が弟 Chummie の死と係わるのか?」、「マンスフィールド文学の転機となつたのは何故か?」という二点で、極めて注目すべき作品である。

1

Katherine Mansfield の本格的な創作期間は、ロンドン再訪を果たした1908年から22年（死の前年）までと考えられようが、「風が吹く」は、まさしく中間点にあたる1915年秋に発表されている。

1915年といえば、作家の生涯のなかで多事多難の年、というよりむしろ危機の年であった。同棲中の文芸評論家 J. M. Murry との不仲、悪性の風邪、一向に涉らぬ創作、手元不如意など八方塞がりの状態を打開する道として、この年2月中旬、彼女は作家 Francis Carco の許へ愛の逃避行を試みた。折しも第一次大戦のさなか、彼はフランスの戦闘区域で軍務についていた¹。‘An Indiscreet Journey’（1915年）がこの時の経験を垣間見させてくれる。

マリと和解はしたものの、創作に専念するため、その後わずか4ヵ月たらずの間に三度渡仏と帰英を繰り返した揚句、6月にロンドン St. John's Wood の Acacia 通り5番地に落ちついている。英国陸軍に志願入隊するため渡英していたチャミーが、オックスフォードの士官訓練課程にいるあいだ、折をみては訪ねたのがこの家である。殊に8月の第三週²を姉弟水いらずで過ごした。二人が借家の庭を歩いていると、ポプラに似た細い木から石のように硬い実が落ちる。

「ケイティ、あの音聞いた? 見つかるかなあ? ほんとに懐かしい音だね」

二人の手が湿った芝生の上を這い回る。チャミーは実を拾い上げると、昔そうしたようにハンカチでこする。

「あの古木に梨がいっぱいあったの憶えてる？」

「次々と落ちてくる実が、かがみこんでる私たちの背中や頭に当たって、よーくはずんでたわね³」

梨の木にまつわる記憶に端を発して、故郷ニュージーランドの思い出が続々と湧いてきて、「ねぇ、覚えてる？」「あれ知ってる？」と飽くことを知らなかった。

2

「風が吹く」はこのように始まる。

突然—— 怯えて—— 彼女は目を覚ます。何があったのか？ 何か恐ろしいことが起こったのだ。いや、何も起こってはいない。ただ風が家を揺さぶり、窓をがたがたいわせ、鉄片を屋根に打ちつけ、彼女のベッドを震わせているだけだ。木の葉が窓をよぎって舞いあがり、飛び去る。向こうの街路では、新聞紙が丸ごと、糸の切れた凧のように揺れ動き、舞いおちて松の木に突き刺さる。寒い。夏は終わった—— もう秋だ—— あらゆるものが醜い。(中略)すべてが終わった！ 何が終わったというのか？ あゝ、何もかもだ！

突然目を覚まして怯える彼女の「恐ろしいこと」とは何か？ とりわけ「すべてが終わった！・・・あゝ、何もかもだ！」とは一体どういうことだろう？

この終末感ないし喪失感は、Matilda という少女の年齢を考えると、いかにも唐突でそぐわないように思われる。いわゆる子供の目の高さで見られたものではなさそうだ。とすれば、これは多分に当時の作者の不用意とも言えるほどに率直な感情移入とみるのが自然ではなからうか？ それなら、恐ろしい突発的出来事も、夏が終わり、秋になって、あらゆるものが醜く感じられるのも、少女マチルダの視点を借りた作者の真情の吐露と受けとれる。大陸へ渡る弟を9月の末に見送ったばかりのキャサリンにとって、10月初旬に届いた彼の訃報はまさに晴天の霹靂であったろう。もはや愛する弟と現在を分けもつことが出来なくなった絶望感、交わした約束がこの世で果たせな

くなった無念さ、弟に託していた諸々の期待が瓦解したことの痛恨と脱力感が、作者の目に映る世界を暗くし、物みなを醜く見せて、何もかも終わったと思わせたとしても不思議はない。

では「風が吹く」はチャミーの死を知ったあとで書かれたと考えるべきであろうか？

しかしこの考えには先ず時間的に大きな問題がある。というのは Saralyn R. Daly の著書目録をはじめ、Hanson と Gurr その他多くの研究者の記述で明らかのように、「The Wind Blows」は当初「Autumn II」という題で1915年10月18日に発表された。掲載誌は、作者自ら D. H. Lawrence, J. M. マリと共に編集にたずさわって、文字通り3号雑誌(1915年10月4日、18日、11月1日刊)⁴ に終わった The Signature の第2号である。チャミーが演習中に事故死したのは、その11日前の10月7日であった。

なるほど The Signature の執筆には三人の編集者だけで当たったこと、予約制で、黄褐色の薄い小冊子⁵ だったこと等の事情はあるにしても、脱稿から植字・印刷・校正・製本・出版という工程を考えれば、僅か11日間で「風が吹く」を発表するのは、時間的に殆ど不可能とみるべきであろう。

次に11月下旬の作者の日記を読めば、「私は長いこと自分の人生は終わったというふうに考えていた。だが弟に死なれて始めてそのことを実感し確認している」⁶ とある。

さらに作品を全体として見るとき、これがチャミーへの鎮魂もしくは追懐の作とは思えないのである。たしかに冒頭の一節には弟を失ったあととともれる表現が散見するし、遠く海鳴りが啜り泣くように聞こえたり、マチルダが人生ってとてもおっかないと呟きもする。だがその他は、実際的な母親と、彼女が領する俗物的な家庭に反発するマチルダ、ピアノ教師がかもし出すロマンティックな雰囲気なかで、仄かなあこがれを抱く少女の様子が子細に描かれ、弟を思わせる Bogey が登場するのはずっとあと、作品の2/3以上を過ぎた所からである。彼は独りで部屋にいるマチルダを外へ誘う。

海岸通りへの路は、さらに風が強く、二人は寄り添って急ぐ。大きな蒸気船が、吹き荒ぶ風をもとせせず、波を切り、尖った岩の間に開いた遠くの港門へと向かって進む。その目指す行き先はどこか・・・海岸通りから凝視している二人が、いつの間には船に乗りこんでいて、仲よく腕を組み合って甲板の手摺りに寄りかかり、街の方をふり返っている。

「・・・あの二人はだーれ？」

「・・・姉と弟だよ」

「見て、ボギー。あれが街よ。小さく見えるわね。郵便局の時計が鳴ってるけど、聞き納めね。あの風の強かった日、私たちが歩いた海岸通りが見えるわ。憶えてる？ 私、あの日ピアノのレッスンで泣いちゃった——何年前になるかしら！ さよなら、小っちゃな島、さようなら・・・⁷」

(・・・は作者)

ここへ来て「風が吹く」は、何よりも少女マチルダの現状からの脱出願望を描いたものであるのは明らかである。弟との親しい語らいから生まれたと思われるこの作品で、作者は Piccadilly Circus のきらめく光に遙かな想いを馳せながら、悶々としていた遠い日の自らの姿を、よき理解者、頼もしい味方である弟と一緒に、風の強い故郷 Wellington に戻してふり返ってみたかったに違いない。

‘wind’は作品のなかで14回くり返される。風はある時は暴威をふるう紊乱者であり、また、はやる心を屏息させもすれば、逆に鬱積した内心の蟠りを爆発させる誘因ともなり、志気を鼓舞して行動へと駆りたててもする。マチルダがうろ覚えの詩句を出鱈目に並べて、風を歌った詩人がいたとは、P. B. Shelley のことで、殊に彼の ‘West Wind’は、地上の、空中の、海の中のものすべてを恐れおののかせる破壊者であって同時に、新たな生命を吹きこむ守護者ともなる奔放・激烈な風である。

3

マンスフィールドの文学について、どこが良いか判らないが、ただ何となく良い⁸という批評にならぬ批評を聞く。いかにも繊細でみずみずしい感覚、時に息を吞ませる新鮮な表現、澄んだ抒情性、余情あふれる ending 等々、いわば一陣の清風が行間を吹きぬける気配があって、上記のような感想になるのであろうが、実はこれらの特質は、彼女の初期の作品には概して認められないのである。

「風が吹く」以前の主要なものを例にとると、1908年にウェリントンで書かれたと思われる ‘The Tiredness of Rosabel’ は、ロンドンのとある婦人帽子店で働く、孤独で貧しい少女が、昼間見た如何にも仕合せそうな若い男女の境遇を羨み、金持ちの少女と我が身を入れ替えて夢想する話であり、‘The Child - Who - Was - Tired’は1910年に発表され、Chekhov の「眠

い」を模倣した作品として知られる。貧乏人の子沢山の家庭でさんざんこき使われ、睡魔に襲われた子守りの少女が、更に次々と仕事を言いつけられて、一刻の眠りを貪ろうと、大声で泣きつづける赤ん坊の顔を枕に乗せ、赤ん坊がもがくのも構わずに力をこめて押しつける。

この頃の作者の生きざまは過激であった。故国へ連れ戻されていた二年間の鬱憤を晴らすかのように、〈体験〉を漁った。突然の結婚とその翌日の家出、地方を巡業する楽団への参加、夫のでない子供の妊娠、Bavaria は Wörishofenでの保養と流産、各種の賃仕事、中絶、同棲等々である。ある作家がつけた‘Katherine Tiger’⁹ という渾名が、当時の彼女の当たるべからざる勇往邁進ぶりを物語る。

‘German at Meat’も1910年の作である。手前たちこそ大食漢のくせに、イギリス人の健啖ぶりや婦人参政権問題を、批判的に食卓で話題にするドイツ人の様子が、イギリス人である「私」の目を通して、スケッチ風に描かれている。‘A Birthday’ (1911年)では、4年間に3人目を出産する妻への期待と不安を抱える夫を描く。人物たちの名前はドイツ風であるが、性格や家族構成はのちのBurnell一家であり、風景も明らかにウェリントンを思わせる。作品にはおのずから創作時の作者の関心と、作者をとり巻く諸々の状況が反映するもので、In a German Pension (1911年)と題した第一短篇集は、総じて「私」という人物の目に映る外部の世界に対する皮肉な批評的態度が濃厚であり、例外はあるにしても、作者はおおむね人物の外側にいる感じを与える。

4

一転して「風が吹く」では、作者は徹底的に人物の内側に入りこんでいる。この作品をマンスフィールド文学のなかで画期的なものにしている要素の第一が、この「視点」である。

ここでは外部の世界に対するマチルダの感応よりも、少女がもともと持っているものを内的独白や描出話法を用いて表現する。マチルダはのちに Kezia Burnell, Laura Sheridan となつて、他の作家の追隨を許さぬほど、子供たちの心理が見事に活写されることになる。

第二に読者の意表をつく「書きだし」が挙げられる。

‘Prelude’の冒頭の一節のように、それまでのさまざまな経緯を一切省略して、読者をいきなり物語のなかに引き入れるのだが、最初から接続詞と代

名詞で始まる 'A Dill Pickle' の And then, after six years she saw him again. (下線筆者) や、夙に有名な 'The Garden Party' の And after all the weather was ideal. (下線筆者)、更に 'Honeymoon' など、物語のもつ始め・中間・終りという常識をくつがえす斬新な書きだしの嚆矢となったのが、ひときわ目を惹く「風が吹く」の Suddenly — dreadfully — she wakes up. (下線筆者) である。

人間誰も自らの生命の始まりと終りを知らない。人生は自分の注文通りになるものではない。作者は1922年3月13日付けの William Gerhardie への手紙で、世の中の進行は先ずAがあって、次にBにならねばならぬということはない。AとBが同時に起こり得るし、死も含めて避けがたいもののなかに美があるのだという趣旨のことを述べている。いつ、どこで、何が起きるか分からないのが人生なら、作品もどのような始まりかたであってもいい道理である。

次に「象徴」の技巧が際立っている。

吹き荒れる風が家全体を揺さぶり、窓をがたつかせ、ベッドを震わせるとは、少女マチルダの日常に脅威を与え、彼女の生活そのものを根底から揺り動かすことを意味する。窓外に舞う新聞紙が糸の切れた凧に見えて、少女の定まらぬ心理状態を表し、その落ちる先は、夥しい針をもつ松の木である。がたぴししながら左右に揺れて進む荷車、キャンキャン鳴きながら門を通りすぎる三本脚の白犬など、いかにも佻しい不安定な光景である。自室に閉じこもっているマチルダをボギーが外へ誘うのは、彼女の満たされぬ心の解放を示し、強風のなかを姉弟が体を密着させて進むのは、チャミーが代表する故国と作者との一体化を表すものであろう。その二人が眺める蒸気船は少女のひたむきな憧れの象徴で、船は吹き募る風にもめげず、波をけたてて広い海へと向かう。ハンソンとガーが言うように、マンスフィールドが多大な影響をうけた Arthur Symons の象徴派の美学理論は、心や感情の抽象的な状態を伝えるには、叙述による分析でなく、凝縮された image または symbol によるべきだというものだった。換言すれば、文学の主題も叙述されるべきでなく、呼び起こされるべきもの¹⁰である。「風が吹く」の細部のいかに多くが、叙述的機能と同時に象徴的な機能をもっているかが読みとれよう。

'Fantasy' の要素も無視できないだろう。

少女時代のマンスフィールドが大へんな空想家で、彼女の文学経験はファンタジー物語を書くことから始まった¹¹ようであるが、単なる空想物語にと

どまる筈はなく、やがて現実とのかかわりにおいて人物のその時々心理が描写されるようになる。ピアノのレッスンから帰ったマチルダは、自分の部屋のベッドが怖い。ベッドがそこに横たわって眠りこんでいると感じるのである。これはのちに‘Prelude’の少女キザイアが、自分の背後に、物陰に、階段の上などに‘IT’の気配を感じて気味が悪くなり、また、キザイアの母親で病臥がちのLindaは、一人ぼっちの時に‘THEY’なるものの存在に怯え、見すえられて身動きもできぬようになることがある。ファンタジーは孤独な時によく動きはじめる。人間関係のある時は、日常世界の働きが強すぎてファンタジーの動きをとめてしまう¹²からである。明るい所よりも暗い所、晴天より雨の日、風の日がふさわしいようである。animismというより、宗教学者Rudolf Ottoの言うnuminosum¹³に近い体験といえよう。

「風が吹く」は大胆なファンタジーで幕を閉じる。海岸通りにいるマチルダが、異郷への熾烈な想いから、何年も経って遂にその夢が実現することになった時の自分の姿を、幻視として船上に見るのである。

因に題名の‘the wind blows’は、Mother Gooseの代表的な眠らせ歌‘Hush-a-bye, baby’の二行目にあることも指摘しておきたい。

最後の要素は‘ending’である。

前記の「いのんど漬」の書きだし「それから6年経って、彼女は彼と再会した」が、どのような女と男で、6年前まで二人がどんな関係にあったかを読者に想像させるように、マンスフィールドの作品のエンディングは、内容的にfull stopでなく、dotで終るのが多いため、読者は物語がどのように収束するのかを推測させられることになる。The wind — the wind. で終るこの作品は、後年、例えば少女ローラが兄 Laurieに「人生って——」と言いかけて口ごもる、「園遊会」の最後へと引き継がれることになるのを見ても判るとおり、作者が目指したのは物語の進展や完結でなく、ある情趣・雰囲気その瞬間にとらえて、最高度に表現することであるからに他ならぬ。のちにSomerset Maughamをして、イギリスの短篇小説に独自の境地を拓いた¹⁴と言わせた技巧とは、これらの要素の全体であったに違いない。

「風が吹く」を、このような幾つもの新たな要素をもつ画期的な作品にしたものは何だろうか？

それにはさまざまな背景があって、単一の答えで片づけられる問題ではないが、強いて言えばマンスフィールドの〈自己認識〉であろう。彼女には常々故国とそこに住む人々に対して苦々しい蟠りがあった。世界の文明の中心から遠く隔たり、イギリスの自治領であったとはいえ、ヴィクトリア朝風の道徳が幅をきかして、文学的にも不毛の地と映った。すぐれた文学を生むための〈人生〉は、そこでは得られるべくもなかった。作家をめざす彼女にとって、ロンドンこそ文学の中心であり、ロンドンを措いて人生は考えられなかった。

しかし憧れの地に落ちつき、諸々の経験を積むにつれて、彼女のヨーロッパを見る目も変わっていった。単身ロンドンへやって来た彼女であってみれば、孤独はもとより覚悟の上であったろうが、伝統の染みついた国々、ある意味で亡霊にとり憑かれたように生きている人々のなかで、彼女の疎外感・孤独感はいよいよ深まり、望郷の念が頭をもたげることもあったろう。両親の意思に逆らってウェリントンを捨て、ロンドンを本拠にヨーロッパの各地を転々としながら文学に打ちこみ、独自の小説を創りあげることだけに尽瘁した彼女の人生は、極めて難儀なものであった。

他方、ニュージーランドの生活は、粗野で不体裁ではあろうが、見方を変えれば素朴で活力があり、清新で自然であった。そこでは求めれば優しさ、温かさ、とりわけ心の平和が得られた。それは彼女にとってまさに失われた楽園だった。1903年秋以来の友であり、得難い協力者であり続けた LM (Ida Baker) は、The Memories of LM のなかで、アケイシア 5 番地の家でのチャーミーとの語らいが、キャサリンにとってどんなに幸福であったかに触れている。チャーミーとの度重なる話に触発された思い出のなかの故郷こそ、無尽蔵の鉱脈であることを作家マンスフィールドはしっかりと悟ったのである。

彼女はそれまでシモンズや Oscar Wilde の芸術理論に傾倒し、チェーホフに私淑し、身近かにロレンスの人と作品に接し、なにかんづくマリという犀利な批評家と生活を共にしながら、新しい文学の創造に向けて専念してきた。しかし、いみじくもハンソンとガーの評する通り、1915年3月から5月にかけてパリで下書きをした The Aloe (のちに書き改めて 'Prelude' という題で1918年に発表) は別として、彼女の作品は質的にむらがあり、方向が定まっていなかった。¹⁵

今や「風が吹く」は、作者の進むべき方向を見定めて着手した最初の作品であると同時に、生前の弟を描いた最後のものと思われる点で、全作品中き

わめて特異な位置を占める。但しここには、のちの「序曲」におけるキザイアと母親リンダとの関係と比較すると、母親に対するマチルダのひどく直接的な言動にとげとげしさがあり、また、ピアノのレッスンを受ける他の少女への嘲笑的な視点も感じられて、Undiscovered Country The New Zealand Stories of Katherine Mansfield (Longman, 1974) の序で Ian A. Gordon の言う 'sympathetic recall' がまだまだ十分でない。

「神よ、私を透明な水晶にしてください。あなたの光が射しとおすように」とは、1921年11月21日付けの日記であるが、マンスフィールド文学の最もすぐれた特質である一種特別の散文を生むには、創作する態度としてニュージーランドの思い出を純粋にし、魂からすべての憤りを清める¹⁶ 必要があった。

こうして自らの〈過去〉に沈潜して、故国とそこに住む人々の再生を目指した「風が吹く」のなかに、マンスフィールドの詩的散文は、すでに胎動し始めていたのである。

Notes

- 1 cf. The Collected Letters of Katherine Mansfield Ed. by O'Sullivan & Scott (Oxford U. P., 1984), Vol.1 p. 148.
- 2 cf. Ibid., p. 193.
- 3 cf. Journal of Katherine Mansfield Ed. by J. M. Murry (Alfred A. Knoph, New York, 1946), pp. 34-5.
- 4 cf. Katherine Mansfield The Memories of LM (London, Michael Joseph, 1971), p. 94.
- 5 cf. Anne Friis : Katherine Mansfield Life and Stories (Richard West, 1978), p. 43.
- 6 cf. Journal of KM, p. 38.
- 7 cf. The Stories of Katherine Mansfield Ed. by Antony Alpers (Oxford U. P., 1984), p. 194.
- 8 崎山正毅訳『マンスフィールド短篇集』岩波文庫 8頁参照。
- 9 cf. Clare Hanson and Andrew Gurr : Katherine Mansfield (Macmillan, 1981), pp. 5-6.
- 10 cf. Ibid., p. 22.
- 11 cf. Modern Fiction Studies Vol. 24 1978-9, pp. 465-474.
- 12 河合隼雄『ファンタジーを読む』楡出版。1994年 10頁参照。

- 13 『同書』13頁参照。
- 14 cf. W. Somerset Maugham : Point of View (Heinemann, 1958), p. 177.
- 15 cf. Hanson & Gurr, op. cit., p. 43.
- 16 cf. Ruth Elvish Mantz and J. M. Murry, The Life of Katherine Mansfield (Folcroft Library Editions, 1970), pp. 3-4.